No.83
平成5年12月20日発行

路材協会報

路面標示材協会
東京都千代田区神田佐久間町2−13（深津ビル）
〒101　Tel（03）3861−3656

協会設立20周年記念号

目　次

設立20周年記念式・祝賀会を開催 …… 2
ご挨拶 …… 会長　真壁　昶 …… 3
協会20年の歩み …… 4
祝賀会にて　あいさつ …… 細川　幹夫 …… 6
〃　挨拶 …… 鈴木　克宗 …… 7
〃　あいさつ …… 堀金　忠 …… 8
〃　乾杯にあたって …… 神宮司英武 …… 9
〃　祝辞 …… 藏野　亘弘 …… 10
路面標示材協会に期待する …… 富岡　貞利 …… 11
記念式にて　祝辞 …… 大澤　照男 …… 12
20年の経過に思う …… 新美喜久雄 …… 15
20年前の技術資料 …… 末岡　力 …… 16
不況時こそ職場の活性化 …… 後藤　静雄 …… 17
路材協発足の頃 …… 宮城眞一郎 …… 18
路材協をつくろう …… 児島　武男 …… 20
嵐亭での理事会の思い出 …… 伊東　誠二 …… 22
路材が新製品であった頃 …… 鳥取更太郎 …… 24
協会との思い出 …… 野村　輝彦 …… 25
事務局便り …… 28　余滴 …… 28

協会設立二十周年

記念式・祝賀会を開催

当協会が設立されたのは昭和48年であり、今年は20周年に当たるため、去る11月25日、東京都内市ヶ谷の「グランドヒル市ヶ谷」において、記念式及び祝賀会を行いました。その概況は次のとおりです。

第Ⅰ部　記念式

午後２時から、２階「白樺の間」で、正会員と賛助会員60名余りが出席。今村専務理事の司会により、開会の辞を高尾光挌副会長から、式辞を真壁昶会長から、賛助会員祝辞（代表）を日本ガラスビーズ協会の会長大澤照男氏から、の順で進行。

次いで、創立10周年以降におけるものとして、正会員表彰（ＯＢ感謝状、現役表彰状）と賛助会員表彰（団体、企業へ感謝状）が行われた。

第Ⅱ部　記念祝賀会

午後３時から、３階「珊瑚の間」で来賓を含む90名余りが出席し、今村専務理事の司会で開会。

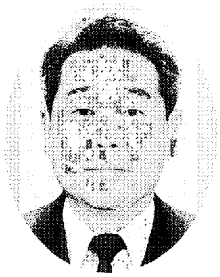
まず、真壁昶会長が挨拶を申し述べ、次いで、ご来賓からのご祝辞・ご挨拶を、通商産業省基礎産業局化学製品課の細川幹夫課長殿、建設省道路局企画課の鈴木克宗調整官殿、警察庁交通局交通規制課の堀金忠課長補佐殿から頂いた。

ここで乾杯に入り、㈳全国道路標識標示業協会の神宮司英武会長殿の祝意と音頭により祝杯を上げた後、再び、参議院議員下稲葉耕吉殿の秘書國里吉則殿及び㈳日本塗料工業会の藏野亘弘常務理事殿から祝いのお言葉を受けた。

なおその他、ご来賓の官公庁の方として、通商産業省化学製品課の課長補佐篠崎晴彦殿、同通産技官村松学殿、工業技術院繊維化学規格課の課長補佐橋本繁晴殿、警察庁科学警察研究所交通部の主任研究官有薗卓殿、建設省土木研究所交通安全研究室の研究員安藤和彦殿を読み上げ紹介。

乾杯以後、祝賀会は懇談・懇親に移り、時間を経過。午後４時半頃、㈳全国道路標識標示業協会の柳井洋蔵専務理事殿により中締め、そして謝辞を協会の高尾光挌副会長が申し述べて、盛況裡に閉会となりました。

路材協設立20周年に寄せる



ご　挨　拶

会長　真　壁　　昶

私共、路面標示材協会もおかげ様で昭和48年設立以来20周年を迎える事になりました。これも偏に会員各位の絶大なるご努力の賜であり、又併せて内・外各位の深いご理解と一段のご指導・ご鞭撻があっての事と心より厚く御礼を申上げる次第であります。

振り返って見ますと当協会は設立以来、関係官公庁各方面のご指導のもとに

1. 公害関連への技術見解の作成
2. 道路標示材黄色々調の統一化
3. 用途面から見たトラフィックペイントのＪＩＳ総合規格設定並びに改訂

等、品質・技術レベルの向上に努め、又技術投稿を中心にした協会報や、技術解説書の発行を行い、さらに月次生産状況の自主報告、需要動向の把握にも努力して参りました。

一方この間、ユーザーである㈳全国道路標識標示業協会を始めとする施工業各位から、製品の作業性改善、品質の安定に適切なアドバイスを戴き、さらに原材料メーカー各社からは、原材料の安定的供給や合理化への幅広いご協力を戴いております。

この様に皆様方の全面的なご支援・ご協力があればこそ協会設立から今日まで20年の歴史を歩み続けて来られた支えと力になっている事と存じます。

改めて、会員一同、心より感謝を表明致したく存じます。

まもなく21世紀に入りますが、次世代に向け当協会も一段と厳しい状況下に置かれている事は皆様ご承知の通りであります。

この様な時こそ、交通安全・施設整備の一端を担うものとして

1. 社会的要請に応える技術開発の促進
2. 交通安全に関する需要開発
3. 社会ルールにのっとった会員相互の信頼関係の向上

こそが社会に貢献出来る、又我々に架せられた使命と存じます。

協会設立20周年にあたり、会員各位の一段の自覚と共に、関係各位の一層のご指導・ご鞭撻の程をお願い申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

（神東塗料㈱特品分野担当・東京特品部長）

協会二十年の歩み

昭和46年６月　前身の「路面標示材懇話会」が発足。

昭和48年６月　「路面標示材協会」を設立（会員15社）

会長　田中　　工氏

事務局を大田区下丸子　堺商事㈱内に置く。

10月　賛助会員の加入始まる。

昭和49年10月　発注機関の仕様書（材料規格）の調査開始。

昭和50年２月　千代田区富山町　西川ビルに事務所を設置。

小原陽二氏が事務局長に就任。

５月　「路材協会報」を発行。

常任理事制を設置（定款の一部改正）。

会長　石渡清司氏

８月　製品袋に「路面標示材協会会員」の表示実施。

11月　路面標示材用黄色顔料について公害関連への技術見解を発表。

昭和51年６月　道路標示の黄色色相の実態調査を開始。

昭和52年５月　専務理事を設け、小原陽二氏が就任（定款の一部改正）。

会長　竹嶋正幸氏

７月　道路標示の黄色色相の適性候補調査。

昭和53年２月　警察庁の「道路標示黄色」選定試験実施に代表警察本部、㈳全標協と協力。（その実験準備と結果のとりまとめを実施）。

６月　警察庁通達「道路標示ペイントの黄色の統一」の実施促進。

８月　同上に関し「路材協会報」に道路標示黄色特集号を編集して業界に配布。

７月　工業技術院からＪＩＳ　Ｋ5665ほか、トラフィックペイントについて総合規格化を委託され、改正作業を開始。

昭和54年４月　会長　西川政之助氏

７月　月次式の会員生産報告制を実施。

昭和55年７月　ＪＩＳ　Ｋ5665（トラフィックペイント）の総合改正原案を作成。

９月　道路塗料需要調査の方式を改め実施（以後毎年）。

昭和56年２月　ＪＩＳ　Ｋ5665（トラフィックペイント）全面改正。

５月　協会創立10周年記念祝賀会開催。（正会員17社）。

会長　新美喜久雄氏

７月　技術解説書「トラフィックペイントの手引き」を発行。

協会事務所を神田佐久間町　深津ビルに移転。

昭和57年１月　「路材協会報」に会員広告の隔号掲載を開始。
昭和58年５月　会長　小 暮 房 男氏
８月　技術解説書「解説路面標示材料」を発行。
昭和59年５月　交通安全関係海外研修（欧州）を実施。
昭和60年４月　役員任期の変更、会長１年交代制。
（定款の一部改正）
５月　会長　木 村 文 雄氏
昭和61年５月　会長　中 脇 久 雄氏
８月　技術解説書「路面標示用語」を発行。
ＪＩＳ　Ｋ5665の見直し開始。
昭和62年３月　ＪＩＳ　Ｋ5665改正（名称を「路面標示用塗料」に変更）。
５月　会長　河 合　　保氏
昭和63年５月　会長　関 原 将 利氏
７月　事務局長に今村晴知氏就任。
11月　「路材協会報」に正会員会社プロフィールの連載を開始。
12月　㈳日本塗料工業会へＪＩＳ　Ｋ5665の試験項目に関する調査依頼に対し回答書提出。
警察庁へ路面標示用黄色塗料の顔料について安全性に関する回答書を提出。
平成元年５月　会長　末 岡　　力氏
専務理事に今村晴知氏就任。
10月　欧州交通環境調査研修を実施。
平成２年５月　工業技術院、㈳日本塗料工業会から指示と要請を受け、ＪＩＳ　Ｋ5665の見直し開始。
会長　新 美 喜 久 雄氏
７月　技術解説書「路面標示材料（改訂版）」を発行。
12月　「路材協会報」に賛助会員各社プロフィールを連載開始。
平成３年６月　ＪＩＳ　Ｋ5665改正の解説文と用語修正作業。
平成４年５月　役員任期２年制復活（定款の一部改正）。
会長　真 壁　　昶氏
11月　ＪＩＳ　Ｋ5665改正の告示。
平成５年５月　常任理事制の廃止（定款の一部改正）（正会員16社）。
10月　米国交通環境・塗料展調査研修を実施。

あいさつ

細川幹夫

路面標示材協会の設立20周年おめでとうございます。

塗料全般を担当しております化学製品課と致しましては、この様な祝賀会が行われることは非常に喜ばしいことであります。

20年と言えば、人にたとえてみればいわば成人式を迎えられたわけであり、これからは、益々責任も重くなるということでもあり、厳しい世の中ではありますが頑張って下さい。

最近の世の中は景気が冷え込んでおり、右を向いても左を向いても暗い顔ばかり拝見している中で路面標示材業界の方は、建設省ほか関係省庁のご配慮もあり、まあまあの状態と聞いておりましたが、本日、皆様のお顔を拝見いたしますとお元気そうなので私も安心致したところであります。

路面標示材というのは、私が申すまでもなく、交通安全と密接に関係があるわけでありまして、これまで色々と技術面でも向上を図られてきたところでありましょうが、更に耐候性、視認性の向上をはじめ、様々な研究を重ねられて、立派な製品を作って頂きたいと思います。それが引いては、今後、ますます交通安全やその他の運動にも役立つもとであろうと思うものであります。

聞くところによりますと、貴協会は路面標示にとどまらず、交通安全施設等の整備事業に関係する分野にも積極的に取組まれているようですが、関係各位のご指導、ご協力のもとに交通安全に関係する技術開発の促進や路面標示に関する新たな需要の開発に積極的に取組まれ、着実に発展されることを期待しております。通産省でもお役に立つことがあれば何なりとおっしゃって頂きたいと思っております。

最後に、路面標示材協会並びに会員各社の益々のご発展と本日ご参集の皆様方のご健勝を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせて頂きます。

（通商産業省基礎産業局化学製品課長）

挨　　拶

鈴　木　克　宗

貴協会の20周年をお祝い申し上げて、一言御挨拶いたします。

私は、建設省で交通安全全般を担当いたしておりますが、丁度、当協会が設立された昭和40年代後半は、特に交通事故が多発し、戦後最悪の状況でした。都市内の狭い道路に人と車が犇めき合っており、高速道路やバイパス、歩道などの道路整備を積極的に行い、地域内や道路内での歩車分離、円滑な交通流の確保を進めました。これに、警察庁の交通管制センターの整備が進み、昭和45年に16,000人余であった交通事故死者が、なんとか昭和54年には半減させることができました。

しかし、最近、事故の質が変化してきており、交通事故死者が増加傾向にあります。例えば、近年の社会は24時間、活動をしつづけており、夜間の交通事故死者が昼間を上回っています。また、高速道路の事故は、雨天時は通常の何倍にもなります。車道の幅が十分あっても事故がおきるわけで、安全運転にはさらに車の道標が必要となるわけです。

そうなると、車の道標である路面標示材には、夜間や雨天時の視認性が求められるわけでありますが、一昨年、約２年の期間をかけて貴協会等の約10社が開発した製品が建設省の技術評価制度で非常に効果的であるとの評価を受け、各地で積極的に利用することになりました。貴協会の活動が実を結んだわけですが、建設省としても、道路整備五ヵ年計画で道路整備に必要な技術開発を積極的に進めることとし、技術開発の五ヵ年計画を同時に策定をしました。通産省の御協力も得ながら、技術開発・普及に今後、ますます努力する所存であります。

しかし、なによりも、路面標示の分野では、路面標示材協会の果たす役割が極めて重大であり、10年後の30周年の際には、さらに貴協会が先駆的な技術開発を進め、ますます発展しているものと期待し、簡単ではありますが、私のお祝いの言葉といたします。

（建設省道路局企画課調整官）

あ　い　さ　つ

堀　金　　忠

まずは、本日、設立二十周年という記念すべき年を迎えられ、おめでとうございます。

さて、役所が所管するいろいろな中で、交通事故は、個人の身体・財産にも関係する重要なことであると思います。

残念ながら、このところ4年連続して交通事故死亡者は、1万1千人台にあり、今年は少し減少気味ですが、事故発生件数は増加しております。

交通事故に対する対策としては、交通に関する教育であり、取締りであるほかに、交通管理というか、交通規制としての標識や標示が必要で、中でも道路標示は重要と思いますが、標示についてはこのところ視認性のいい材料を開発され感謝しています。

然し、今後も道路整備が進む中で、標示の材料について、まだ進めて欲しいことがあります。一つは、公害関係について、車の通行で道路に塗られた標示線が削られ、粉じんや排出口を通っての生活環境に影響することも考えておくことが必要と思います。二つには、材料の摩擦係数が路面の摩擦係数と近いことが交通上望ましいことだろうと思います。三つには、耐久性を考えた経済面から、安くて長持ちするものへ一層努力して欲しいと思います。さらに標示は標識と違って、雨や雪など、気象条件に弱いと思うので、まだ改善の余地があるのではないでしょうか。

今後も車社会が続く限り道路標示の需要はあるので、交通安全事業について側面から支援して頂ければ大いに助かります。

以上いろいろ申し上げましたが、今後の会員各社のご発展とご参集皆様方のご多幸を祈りお祝いの言葉と致します。

（警察庁交通局交通規制課課長補佐）

乾杯にあたって

神宮司英武

協会設立20周年おめでとうございます。

十年ひと昔といわれますが、路材協さんは今日すでに20周年を迎えられたわけで、この間の業績は貴協会「20年の歩み」を拝見しましても立派なことが十分うかがえます。ここに改めて関係各位のご活躍に対し敬意を表するものであります。

又、貴協会は、私ども㈳全標協の賛助会員として、常日頃協会の事業にご協力を頂いており、本席をおかりして厚くお礼を申し上げます。

（㈳全国道路標識標示業協会会長）

＜ 以 下 乾 杯 へ ＞

○ ○

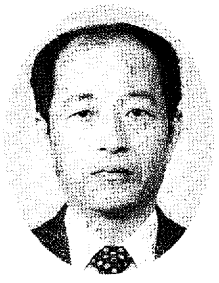
乾杯に続いて、当協会がご指導を頂いている

参議院議員　下稲葉耕吉殿　の代理として

秘書の國里吉則氏から、20周年への祝意と

「交通安全施設事業のために、貴協会は会長を中心に力を合わせ、現在の不況を乗り切って今後益々の発展をされるよう祈念いたします」

旨の言葉を頂戴しました。



祝　　辞

藏　野　亘　弘

路面標示材協会の設立20年の祝賀会に㈳日本塗料工業会を代表致しまして謹しんでお祝い申しあげます。

「協会20年の歩み」を拝見致しますとこの協会が設立当初から、交通安全の見地から路面標示材の普及や高度化する性能要求に対して、その技術向上と改善に多大の努力を払われた歴史が偲ばれ、貴協会の今までの活動に対して敬意を表する次第であります。

路面標示材は塗料の一種でもあり、幾つもの共通な技術課題や環境・安全問題を抱えているので、それらの対応や解決にあたっては、相努力していくことが重要であり、今後とも、貴協会員の方々と密接な関係をもつことは極めて必要なことであります。

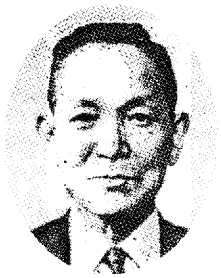
日本塗料工業会はＪＩＳ　Ｋ　5665　路面標示用塗料の主管団体で、一昨々年行なわれた改正作業では貴協会員委員の一方ならぬお世話になりました。この席を借りて厚くお礼申しあげます。

路面標示用塗料は通産統計の中にもとりあげられており、生産量は約10万トン前後、全塗料生産に対して数量で５％、金額で2.３％を占めており、長期的に漸増傾向にあります。

路面標示材は社会整備、特に陸上交通システムの効率化や改善・維持、安全の確保のためには極めて重要な資材で、それらのニーズに応える技術課題の解決は極めて重要であり、交通安全という社会使命を担う業界として今後とも、画期的な製品を市場に提供されていくことを深く願ってやみません。

20年を将来の飛躍のための一つのターニングポイントとされ、路面標示材協会ならびに会員諸会社の益々のご発展を願ってお祝いにかえさせていただきます。

（㈳日本塗料工業会常務理事）



路面標示材協会に期待する

富　岡　貞　利

路面標示材協会が設立20周年を迎えられましたことを心からお慶び申し上げます。

私ども(財)日本塗料検査協会は路面標示用塗料等の品質管理・品質保証の面において公的検査機関として、またＪＩＳ原案作成委員会にも中立側委員としての参画等により貴協会とかかわって参りました。

路面標示用塗料の需要は主として官公庁でありますので、ＪＩＳが最も活用されている塗料規格の一つとなっており、また他の塗料以上に施工と一体となって始めて機能・耐久性を発揮する塗料でありますので、ＪＩＳにおける品質は施工性、機能を加味したものとなっていますが、この製品規格の中で社会の要望に沿う必要性能のすべての品質を規定化するのは無理でありますので、今後貴協会が中心となり材料及び施工仕様を一体化した総合的な基準を確立されるよう期待いたします。

また日本塗料検査協会は工業標準化法に基づいた認定検査機関としての公示検査をＪＩＳ路面標示用塗料についても官報公示により行ない、ＪＩＳ製品の信頼性の確保の一翼を担っていますが、今後とも公示検査に対する貴協会の適切なる対応を期待します。

現在、路面標示材業界及び路面標示用塗料を取り巻く環境には厳しいものがありますが、貴協会においては今後は製品の品質のみならず、施工を含めたＩＳＯ9000（ＪＩＳ　Ｚ　9900）に基づく購入者の立場に立った外部品質保証に係る品質システムの導入の検討を進められ、会員各社の品質管理向上に役立てるとともに、国際化に対応する体制をとられることを期待いたします。

(財)日本塗料検査協会専務理事）

祝　　辞

大　澤　照　男

本日は路面標示材協会設立20周年記念式典にお招き賜り、また、賛助会員を代表して、お祝いの言葉を述べさせて頂く機会を得ましたことは、私にとりまして大変光栄とするところでございます。

さて、貴協会におかれては、昭和48年６月に「路面標示材懇話会」から「路面標示材協会」として新たなるスタートをされました。

その当時のわが国の経済はオイルショックにより低成長時代に突入し、また、貴協会に関連する交通安全事業は、道路交通事故の多発により、政府によって、第１次の「道路交通安全施設整備５ヵ年計画」がスタートした３年目に当り、まさに第１次交通戦争と言われていた時の船出であったと存じております。

しかしながら、貴協会は初代会長様を始めとして、歴代の会長様、専務理事様を中心として、会員各位が連携を密にされ、地道な調査活動や広報活動を推進され、業界の発展にご尽力され、今日に至っておられます。

特に交通安全施設としての路面標示の重要性とその効果を「路材協会報」の発行により、官公庁並びに関連業界への啓蒙活動を通じ、多くの理解者を得たことは申すまでもございません。

また一方、技術面では「道路標示の黄色の統一化」、「トラフィックペイントの総合規格化」、「路面標示用塗料のＪＩＳ改訂」や数々の「路面標示の視認性向上を図るための研究、調査」等々の活動を着実に進められ、今日の技術的基礎を作られ、その業績は高く評価、賞賛されているところでございます。そしてこの業績が今や我国の路面標示が世界一の地位をもたらしたと申せましょう。

さて、これからの交通安全事業は、交通事故による死者数が増加傾向にあり、第２次交通戦争と言われている中で道路の「路面標示」の重要性と必要性はますます高まって来るものと予測されます。

このような中で、貴協会が今後とも、技術力と指導力を存分に発揮され、「安全で円滑な交通環境」のクルマ社会の実現を目指されることをお願い申し上げ、この栄えある路面標示材協会設立20周年を契機に一段と飛躍されますことを祈念申し上げ、私のお祝いの言葉とさせて頂きます。

（日本ガラスビーズ協会会長・東芝バロティーニ㈱取締役社長）

路面標示材協会　会員一覧（五十音順）

平成５年11月現在

（正会員名）	（主な所在地）
アトム化学塗料㈱	東京都板橋区舟渡3-9-2
大崎工業㈱	大阪府堺市上89番地
㈱キクテック	名古屋市南区加福本通1-26
湘南化成㈱	東京都港区芝2-18-4
信号器材㈱	川崎市中原区市の坪160
神東塗料㈱	東京都中央区八重洲1-7-20（八重洲口会館）
セイトー㈱	静岡県静岡市下川原3555番地
積水樹脂㈱	大阪市北区西天満2-4-4（堂島関電ビル）
大日本インキ化学工業㈱	東京都中央区日本橋3-7-20（ディックビル）
太洋塗料㈱	東京都大田区東糀谷6-4-18
㈱トウペ	大阪市北区堂島浜2-1-29（古河ビル）
日本ポリエステル㈱	大阪市北区芝田2-8-33（八谷ビル）
日本ライナー㈱	東京都千代田区神田錦町2-11-7（小川ビル）
日立化成工材㈱	東京都足立区足立2-40-16（コムロビル）
富国合成塗料㈱	神戸市兵庫区永沢町3-7-19
レーンマーク工業㈱	広島市安佐北区安佐町大字飯室字森城6864

（賛助会員名）	（主な所在地）
石原産業㈱	東京都千代田区富士見2-10-30
菊池色素工業㈱	東京都豊島区巣鴨3-5-1
トーケムプロダクツ㈱	東京都港区高輪4-6-23　三菱マテリアル高輪会館
トーネックス㈱	東京都中央区築地4-1-1　東劇ビル
東邦顔料工業㈱	東京都板橋区坂下3-36-5
日本ガラスビーズ協会	東京都港区芝3-3-10 タツノ第３ビル（東芝ﾊﾟﾛﾃｨｰﾆ内）
日本ゼオン㈱	東京都千代田区丸の内2-6-1　古河総合ビル
日本製袋工業㈱	東京都渋谷区桜丘町3-4
日本無機化学工業㈱	東京都板橋区舟渡3-14-1
丸善石油化学㈱	東京都中央区八丁堀2-25-10
三井石油化学工業㈱	東京都千代田区霞が関3-2-5　霞が関ビル

今回の表彰者一覧（敬称略）

正会員ＯＢ（感謝状）

株式会社キクテック	新　美　喜久雄（理事、会長２回）
大崎工業株式会社	河　合　　保（理事、会長）
信号器材株式会社	末　岡　　力（理事、技術委員、会長、委員長）
信号器材株式会社	宮　城　眞一郎（理事、業務委員、委員長）
日立化成工業株式会社	豊　田　　玄（理事）
日立化成工業株式会社	児　島　武　男（業務委員、委員長）
積水樹脂株式会社	藤　戸　昭　康（業務委員、委員長）
神東塗料株式会社	沢　田　良　英（業務委員）
信号器材株式会社	熊　澤　克　俊（業務委員、委員長）
大崎工業株式会社	鳥　取　更太郎（技術委員、委員長）
株式会社トウペ	迫　尾　　宏（技術委員、委員長）
路面標示材協会客員	小　原　陽　二（専務理事）

正会員現役（表彰状）

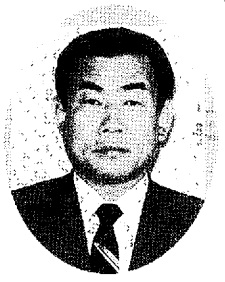
セイトー株式会社	後　藤　静　雄（理事）
富国合成塗料株式会社	小　西　雅　之（理事）
アトム化学塗料株式会社	関　原　將　利（理事、業務委員、会長）
大崎工業株式会社	野　村　輝　彦（業務委員、委員長）
大日本インキ化学工業株式会社	伊　東　誠　二（業務委員）

賛助会員（感謝状）

日本ガラスビーズ協会

日本ゼオン株式会社	東邦顔料工業株式会社
トーネックス株式会社	石原産業株式会社
日本無機化学工業株式会社	菊池色素工業株式会社
三井石油化学工業株式会社	日本製袋工業株式会社
丸善石油化学株式会社	株式会社トーケムプロダクツ

路材協設立20周年に寄せる



20年の経過に思う

新美喜久雄

協会設立20周年記念も盛会裡に終り私にまで感謝状を頂き光栄に存じます。

今振り返ればこの20年の間、私は二度も会長職をつとめさせて頂くなど理事としては最長年数となり、協会創立10周年のときは会長としてつとめたのも思い出されます。

協会設立初期の頃は、私は40才にも満たない若輩で、大正生まれの各社理事さん達の立派な言葉づかいや話しぶりを聞いて、大きな刺戟と公私に亘り多くの勉強をさせて頂いたことが今なおありがたく思い出されます。と同時に、ちょうど私の会社も、爾来その刺戟を糧に、また、官公庁を始め業界の進展に沿い精一杯の努力をして、まずは今日までの成長を遂げてこられたことに感謝をしているところであります。

この20年、道路交通の変化と進歩は目覚ましいものがあり、特に道路整備にかかる道路管理者による一連の事業、そして警察庁をはじめとする都道府県の警察本部の交通管理・規制などの実施により、今や世界一にも値する路面標示の整備、活動に至ってきました。

然しながら、今日、十数年前の交通安全事業の見方からすれば、第二次交通戦争ともいわれる社会的な交通事故現状に対して、その対策に協力すべき私どもは、標識、標示の両分野で、さらに品質向上を中心とする技術開発や商品開発が必要とする立場にあります。（例えば、路面標示材の視認性や耐久性、また施工作業性の向上など…。）

今後の業界発展には、単に己の繁栄のみを先ず画いての立場や行動では相成らぬものであって、お互いの立場をも理解してのよい競争にあるべきかと思います。そして、業務効率化の面からも、“協業”の考えをとり入れることが必要ではないでしょうか。

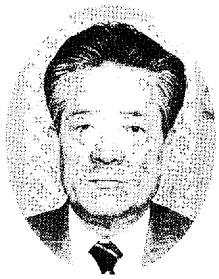
政治的にも、社会資本の充実が改めてうたわれている今日、常に人命にかかわっている交通安全関連の分野にある我々路材メーカーは、官公需中心型の需要にその基盤を求めておればこそ、それぞれが企業努力を常にする限り、その極端な需要増減や経営衰退におびえることもないでしょう。

されば、今後も官公庁各方面のご指導を賜りつつ皆様方とともに、新たな21世紀に期待をかけてさらに一層努力をしたいと思います。

協会20年の節目に、協会理事を去った今日、思うことを一言述べさせて頂きました。

終りに、今後協会が交通社会に貢献され、益々発展されることを祈念致します。

（㈱キクテック、代表取締役社長）



20年前の技術資料

末岡　力

20年前、路面標示材協会が発刊した技術資料の第１号は、Traff. Engg. Mag. ('72) F.B. Stieg氏の“白色中央線の黄色中央線に対する優位性”という論文の訳文であった。旧聞に属するので簡単に紹介してみたい。

Stieg氏は34年間ペイント産業に関係し、権威ある賞を授与された米国の技術者で、表題の問題について、色の技術的数値を考慮し、挑戦的議論を提出したと該誌は氏を紹介している。

その主張は、黄色は視認性が大きいと信じられているが、その信用は空軍研究所が降下中の飛行機から地上でよく視認されるものとして立証したらしいが、この報告は日光のもと、青空、緑の草木に対する色のコントラストに関するもので、道路で夕闇から明け方に至る致命的事故の多い時間中の状態ではないと述べ、視認の理論、反射角、感光感度、人間の眼の感度、霧の各項に於て、黄色標示は白に比較して夜間、特に霧中では視認性が甚しく低いことを理論的に記述している。論文では対策として黄色ペイントの組成を白色ペイントに近づけて、白の夜間視認性に近づけること、更に白色ほど視認性の大きい光を反射することはないのだから色を全廃して、別のパターンによることの検討を提案している。

筆者等は杜撰ながら実験でこの主張を確かめた。夜間走行のたびに、気になっている所である。年をとる程、黄色の夜間の微妙な色合いは判じ難いと思われる。高令化時代を迎え、夜間事故の増大化に対し、我々にとっても影響の大きいテーマであるが、視認性に関する一側面を、往時をふり返り述べさせて頂いた。

（信号器材㈱代表取締役社長）

路材協設立20周年に寄せる

「不況時こそ職場の活性化」

後　藤　静　雄

昨今、大企業、中堅、中小企業を問わず職場に「活気がない」と嘆く人が多い。しかしながら、嘆き、ぼやきは、禁物であり、何の解決策にもならない。問題は、そういった不活発な職場の中において、将来性のある若者、中堅社員が埋没し窒息するのをどう防ぐかである。

私は常日頃、幹部に対し、職場を活性化することを念頭に置くよう指示している。このことは、企業にとって会社の維持、存続、発展にかかわる重大事であるからである。

需要と供給のアンバランス、過当競争、コスト高のトリプルパンチの洗礼を受けている中で、企業が生き残るためには、社員の叡知とバイタリティ、そして独創性が是非必要だからである。

社員一人一人が個性豊かで、一味ちがう特性をもって、談論風発に興ずれば、企業は必然的に活性化するだろう。さらにリーダーは異分野、異業種のことを知っていれば、人間として奥行きを感じさせることになる。職場において、このようなリーダーは部下にとっても魅力があり、職場にも明るく、楽しい雰囲気をかもしだすことになるはずである。

自分の個性を大切にし、それを企業の中で発揮する。が、その一方では、他人の個性をも最大限に尊重する。これは、とりもなおさず、自分の限界を知り、自分に不足している部分を、他人のそれによって補完するということである。

こうして異質の個性、才能が企業、職場を媒体として結びつき、新しい花を咲かせ、実を結ぶことができたとき、市場は何の抵抗もなく、その果実を迎え入れてくれるだろう。勿論そのためには、市場のニーズを把握しアイディアをもとにプランを練り、多面的に検討を加えて具体化するという、用意周到な過程を踏むことが必要である。

このような共通の夢を実現させるために、それぞれの個性、才能を遠慮なく持寄れる企業、職場は活力みなぎるものとなるはずである。

（セイトー㈱代表取締役・路材協理事）

路材協設立20周年に寄せる

『路材協』発足の頃

宮城眞一郎

平成5年11月に、路面標示材協会設立20周年の記念式が行われましたことは、まことにおめでたく、お慶び申し上げます。会社の規模・業態が異なる会員間で、幾多の山坂をのり越え、よくもここ迄来つるものかはとの感慨を深く致します。往時より当協会に携わった者として、発足当時の思い出を記してみたいと存じます。

路面標示なるものが、我が国の道路に現われたのは、終戦後の混乱期が過ぎて、昭和25年に道路標識令の改正・施行がなされた以降であったようです。当初はトラフィックペイントおよび道路鋲によってスタートしました。現在の溶融式（溶着式）路面標示の開発は、昭和34～35年頃であり、その速乾性と耐久性の優位さで、瞬く間に全国に普及していきました。その需要に対して、多くの路材のメーカーおよび施工業者が新規に開業し、昭和39年の東京オリンピックを期に、折からの高度成長期の波にのり、又、交通戦争に対する安全対策としての要望を担って、我が世の春を謳歌しておりました。

材料メーカーと施工業者との関係は、系列的或は同志的な繋りが多く、独立した商品として、不特定多数に販売するというものではありませんでした。昭和40年代後半に至って、材料の供給過剰がみられる様になり、複数の材料が一つの施工業者に使用されることもありました。

丁度その頃、昭和45年の暮頃であったと思いますが、当時堺商事（現大崎工業・ラインファルト工業）の澤森稔さんが弊社にみえ、材料メーカーの集いをやりませんかとの勧誘がありました。明けて昭和46年2月2日に、八重州鉄鋼会館の

堺商事東京支店に、堺商事（石渡殿）、東亜ペイント（庄子殿）、日本ペイント（澁谷殿）、日立化成工業（松本殿）、信号器材（宮本）の五社が発起人として初会合を持ちました。

その後毎月会合を重ね、会の性格、メーカーの定義、同業の勧誘と進め、6月28日に日立さんの大崎別館において発会式を行いました。名称も「協会」、「工業会」の案が出ましたが、先ずは懇親の場をということで、路面標示材懇話会として発足しました。路面標示という名称も、ユーザー側が公安委員会は道路標示、道路管理者は区画線と別称であったため、苦肉の策として路面標示と称することになった次第であります。

爾来、日立化成さんの新丸ビル、大日本インキさんのＤＩＣビル、或はトウペさんの斡旋により大阪の電気倶楽部で、と毎月例会を重ねて参りました。昭和48年の春頃より委員会組織をももった協会への気運が高まり、6月に路面標示材協会へ改組し、新発足をしました。事務所を堺商事・信号器材に設けましたが、相変らず持廻り会議であり、専従の事務局も無い有様でした。

昭和50年に入り、アトム化学西川専務のご尽力により、神田の西川ビルに一室を提供して戴きました。併せて事務局長の公募をしましたところ、たった一日の新聞広告で何百名もの応募があり、その中から信濃毎日新聞社を経て、日興証券役員、駒澤大学講師の経歴を持つ小原陽二さんを迎え、漸やく協会らしい形態を整えるに至りました。そして5月には路材協会報を発刊して現在に至っております。

20年を顧りみますと、路材について、開発当時は各社とも独自の品質を誇っておりましたが、昨今はＪＩＳの普遍性を理由としてか、素材の改良によるコストダウンに偏重しすぎている感があります。今一度初心にかえり、路面標示の公共的重要性を凝視して、高規格・高品質の材料が各会員により開発されることを、心から祈念してこの稿を終わらせて戴きます。

（信号器材㈱専務取締役）

“路材協をつくろう”

児　島　武　男

昭和45年７月の蒸し暑い日でした。川崎市市ノ坪にある信号器材を初めて訪問し、宮城さんに区画線材料関係の協会をつくろうではありませんかと相談を持ちかけました。

当時は、高度成長の真只中にあり、道路整備、拡張そして舗装率の向上に道路事業が飛躍的な伸長を続けている時でありました。当然、付帯事業であります道路標示、区画線、標識等、交通安全施設製品も伸びており、メーカーや施工店の新規参入が活発に展開されていた良き時代でありました。

区画線業界は、東のボンライン（信号器材商品名）と西のラインファルト（当時堺化学商品名）が東西の区画線の固有名詞で呼ばれるほど有名でありました。黄色の色調をとりましてもボンラインはレモンイエロー、ラインファルトはオレンジイエローと大きく分けて二つの色に二分されておりました。従って全国展開に注力しておりました当社も含めた後発組は、二色の黄色を準備し供給にあたらなければなりませんでした。又、白色につきましても45度０度拡散反射率の値が、地区によって差があり多品種の原因ともなっておりました。

このようなわけで区画線需要も伸長している折、協会を設立して規格の統一化等諸問題の解決に努力できればと思い、上司の松本部長（路材協初代副会長に就任）に相談した所「つくろうじゃないか」という事になり、先発大手の信号器材を訪問することになったわけであります。

慎重居士の宮城さんは、時期尚早と言う事ですぐには同調して戴けませんでしたが、片一方の大手である堺商事の石渡さん（路材協２代目会長）、沢森さんは快諾して戴き何回か会合を持った後、有志メーカーが鉄鋼ビルの堺商事の事務所に集まり、協会づくりの骨子を練る事になりました。それは年もおしせまった昭和45年12月のことでありました。更に翌年１月同事務所にてメンバーを増やし、協会の名称を路面標示材懇話会として発足の準備をすることになりました。定款

の草案は信号器材の宮城さんが作成され、名称も将来の発展をこめて路面と名付けることが決まりました。これも宮城さんの発案だと記憶しております。

差しあたっての連絡事務所は鉄鋼ビルの堺商事、分室を市ノ坪の信号器材でスタートする事になりました。会計幹事や事務処理は言いだしっぺのこともあり日立化成が担当し私がやることになりました。松本部長が私の勉強のためもあって引き受けた次第であります。大小の封筒は早速日立印刷に発注し、会費徴収のための銀行口座も開設致しました。当時、日立化成は東京駅の西口にあります新丸ビルに事務所がありましたので、同ビルにある協和銀行（現あさひ銀行）に口座をつくりました。その後、路材協の専任事務局として活躍されました小原前専務理、又、現在活躍中でございます今村専務理事も同銀行を利用して戴いております。そしてあわただしく準備作業を終えて、昭和46年６月に日立製作所の大崎別館で路面標示材懇話会が発足する事になりました。また、会議室は会員会社の持ち廻りで実施し、昭和46年には溶融型ペイントの初めてのＪＩＳが制定されました。

当時の幹事会メンバーは、堺化学田中さん、堺商事石渡さん、アトム化学塗料西川（政）さん、信号器材宮城さん、東亜ペイント（現トウペ）庄司さん、神東塗料八木さん、大日本インキ化学工業榎森さん、日本ペイント松澤さん、積水樹脂竹嶋さん、大日本塗料江崎さん、それに日立化成の松本部長のうるさがたが居並び、迫力ある会運営がなされました。私は案内文書きや封筒の宛名書き、そして会費の徴収から銀行振込み、決算書の作成、電話連絡等庶務係に多忙を極め、この頃から席を離れる事が多くなりました。それは今日迄続いております。

百戦錬磨の幹事会に主導され、あれやこれやの努力を重ねて２年間、体制強化を計るため懇話会から協会へ改組し、さらに専任事務局を設置して協会運営を行なうための検討を昭和49年にしました。そして小原陽二さんと言う立派な方を事務局長として迎え入れる事ができたのは昭和50年の初頭でありました。この事につきましては宮城さんが詳しく述べております。

路材協会も今年めでたく20周年を迎えることになりました。平成不況の昨今、設立当時の高度成長が懐かしく感じられますが、勇猛心を発揮して路材協が益々活躍をされ、交通安全に寄与されます事をお祈り申し上げまして、私の回顧録とさせて戴きます。長い間、本当に有難うございました。

（日立化成工業㈱化成品事業部工材企画管理部）

京都嵐亭での理事会の思い出

伊　東　誠　二

昭和54年11月15日（木）…は20年にわたる当協会のお付合いの中で私にとって大変印象深い一日である。その日は晩秋のよく晴れた日だった。理事会は3時からであったが、私は朝から東京を出て、小春日和の古都を小半日見物した後、バスにて嵐山に向った。バスを降り、桂川沿いに数分歩いた渡月橋の手前に、嵐山随一といわれる嵐亭はあった。渡月橋の近くには、今を盛りの紅葉見物の人々が大勢出ていて、川面には何艘かの舟も浮かび、行く秋を楽しむ人々と山と川が調和して、すばらしい光景を織り成していたことが、今も鮮明に記憶に残っている。

理事会は嵐亭で最も格式の高い大広間で行われ、この大広間は前年中国の実力者、鄧小平が訪日した際、宴を開いた部屋であると聞かされ、大変感激したことが思い出される。会議は西川会長（当時アトム化学塗料専務）の下、前年に勃発したイラン動乱の影響を受け、高騰を続ける諸原料対策、協会年会費のランク制度の見直し等、真剣に討議したことを覚えている。特に会費の件については、公平に会費が徴収出来、かつ将来の経費増にも対応し易いとして、西川会長が自信をもって提案した「証紙制度」、つまり協会が会員証紙を販売し、会員は購入した証紙を必ず路材の袋に貼って出荷するというシステム。この案については賛否両派が激論を戦わした末、会費徴収の公平性は得られるが、証紙を貼るための人件費アップと、生産性が落ちコストアップになるという反対意見に押し切られた

形で、会長案は見送られた。この時の、西川会長の残念そうな顔は今も忘れられない。

6時からの懇親会では、鄧小平がその前に座ったという金屏風の前で、懐石料理を食べながら、大正生まれの“路材協の元老”？達、……西川会長、石渡理事（当時堺商事常務）、竹嶋理事（当時積水樹脂専務）、鈴木理事（当時日本ペイント専務、後社長）、松本理事（当時日立化成工業理事、後取締役）、と前々年就任した小原専務理事等、古き良き時代に青春を過ごされた方々の、昔の思い出話しの中から、酒の飲み方や、遊び方、サラリーマンとしての生き方、更には人生哲学等、大変有意義な話を拝聴でき、私にとって、忘れることの出来ない懇親会となった。

時の経つのは早いもので、あれから14年が過ぎ、その時の記念写真の中にいて今も路材協に関係しているのは、小西理事（富国合成塗料）、早田理事（大崎工業）、松田理事（太洋塗料）と私の4人だけとなった。

今、日本経済は底知れぬ不況にあえいでおり、当業界を取巻く環境も、発注官庁予算の伸び悩み、発注方法の見直し等、過去に例を見ない厳しい状況にある。この様な時こそ、諸先輩が営々と努力され、指導された方向、つまり、原点に立返り、先ず会員各社が「協会の一員」であることを、強く自覚するとともに、メーカー本来の使命を遂行することに全力を尽し、この苦難を乗り越えて、来る節目の25周年をより盛大に祝うことが出来ることを熱望し、……思い出の記と致します。

（大日本インキ化学工業㈱化成品事業部企画開発部長）

路材協設立20周年に寄せる

路材が新製品であった頃

鳥取更太郎

私が会社で路面標示材関係の部所に移ったのは1966年だから四半世紀以上にもなる。今改めて振り返ると、この間に一つの製品の開発から成熟に至る過程を経験したことになる。

＜固形製品＞　始めの頃、溶融式の路材は原料を溶融しながら混合し、でき上がったものを型枠に流し込んで、冷してから型枠を外し、固形の製品としていた。この方式によれば製造工程で溶かすので、色も粘度も製造工程で確認できたものである。しかし急速な需要の伸びに対応すべく、'68年には粉体混合品に転換した。これによって工数と熱量の節減を図ることができたし、製品の色落ちも防ぐことができたのであるが、一方、品質管理上の多くの難問を抱える事になり、その完全な解決には時間を要した。

＜クレーム＞　新製品にクレームは付きものである。路材用の樹脂には何が良いかと手さぐりの時代が長く、製品も今日ほど良くはなかったという事情があった。しかし製品が悪くてクレームが来るとは限らない。ユーザーの不適切な取扱でもクレームの原因になるのであり、これも「説明不足」というメーカー側の手落ちによるとされる場合が多い。今日クレームが殆どないという状態に至ったについては、ＪＩＳ表示製品の一般化、所謂「石油樹脂」の登場、技能検定制度の実施、それに我々の作った「解説書」がその効果を発揮していると思われる。

＜解説書＞　（それに先行して各技術委員が協会報に載せられた解説も含めて）は路材がどのメーカーの製品であってもほぼ等しい性能であることを前提として作ることができたものである。その「解説書」の中に路面標示の欠陥の写真をできるだけ網羅して掲載したが、これは路材の実情を広く理解して貰うには有効であったと思う。何よりも、そこに発生したクレームの状態が前もって写真入りで解説されているというのはあり難いことで、電話で話をしてクレーム処理できることにもなった。

このようにして路材はごく普通の製品として世間に受け入れられることになったと思うのであるが、最近はまた「高輝度製品」が新しく登場してきた。今度は塗装面に多少なりとも立体的構造を持たせようとするものであるから、当面は難問山積・悪戦苦闘の時期が続くとの覚悟が必要だろう。お互いにご苦労な事ではある。

（大崎工業㈱取締役建設資材事業部長）

路材協設立20周年に寄せる

協会との思い出

野　村　輝　彦

社外からの表彰として、昭和51年に大阪商工会議所から受けたことがありますが、今回、路材協会から20周年記念に表彰をされ光栄に思います。今回はこの20年間に協会での委員長を含む長い業務委員の他に、監事の役もつとめたことからの様で、自分でも振り返ると本当に長かったと感心します。

今、古いその頃の社内社外の異動を思い合わせると、堺商事㈱よりラインファルト事業部（工事部門と標示材販売部門）へ昭和45年転属命令が出、万博景気に沸きかえる大阪へ転勤し、その２年後には東京に帰り、業界で関係の深い全国道路標識標示業協会の社団法人化や、樹脂舗装協会の設立に参画したり、また路材協にも顔を出していました。その後間もなく、再度大阪へ転勤になったのですが、割合早く東京へ帰ることになった時には、こんどは大崎工業㈱の社員になっており、まさに私にとっては波瀾万丈の様な数年間でした。

そしてその頃、昭和45年よりの10年間は、路面標示業界は大きく変化していましたが、その分、交通安全対策の効果も大きいものがありました。

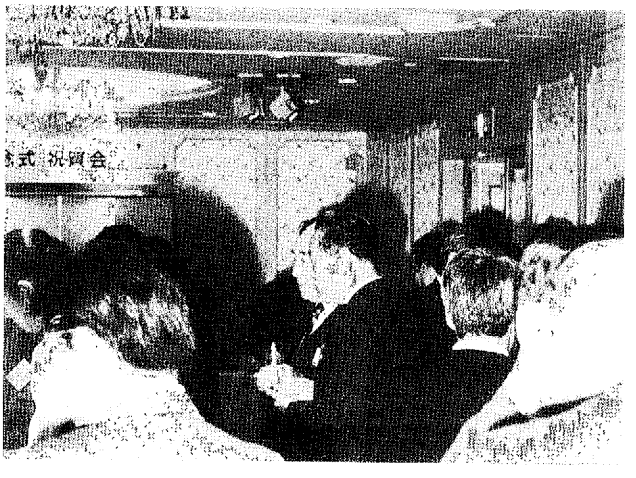
一方、路材協の関係をつとめる傍ら、協会の親睦ゴルフでは、私は“ブービーさん”と呼ばれると共に競馬常勝で印象が皆様に強く残っているはずです。年と共に競馬の方はだめになりましたが、未だブービーの方は健在です。また地区委員は東北、関東、北陸、近畿、四国を担当しましたが楽しい思い出ばかり。特に関東北部某温泉での忘年会は未だ記憶に鮮明に残っております。又協会は異りますが、神戸の標示業協会で連を組み四国の阿波踊りに参加した事は、雨でしたので今も強烈な印象として残っております。

こうしてみると、ともかく、人生の半分を当協会に関係した事を心より幸せであったと思っております。

（大崎工業㈱路材部販売グループ部長）

協会設立二十周年記念式・祝賀会
路面標示材協会

A


式 祝賀会

事務局便り

1. 業務委員会では、現在、今年度の道路塗料需要調査を進めており、近くその集計と解析に移るようになる予定です。現在までの塗料の生産・出荷量は、昨年比数％も落ち込んでいる状態で、その辺の検証になるか関心のもたれるところです。
2. 技術委員会では、ＪＩＳ　３種塗料の黄色チェックを行っており、測定機器や測定方法の差異も検討の対象に論議しつつあります。
3. 米国道路環境・塗料展調査研修を10月27日～11月５日の間実施しました。南部、東部の４都市について、州交通局や道路建設協会とのミーティングで色々な知見を得ることができました。一般的な見聞記は次号に予定しています。
4. 本号掲載のごとく、当協会の設立20周年記念式・祝賀会を、11月25日、東京市ヶ谷で開催することができました。その概況は２頁のとおりで、ご来賓の方々や正・賛助会員各位のご支援まことにありがとうございました。
5. 20周年行事の実施による関係で、12月度の会議は技術委員会のみ行い、理事会と業務委員会は年内行いません。

余滴

協会設立20周年記念の行事がともかく終了してホッとする間もなく、本号会報をその特集号とすることで、まさに事務局はバタバタでした。夏から記念行事のための実行計画小委員会を設けてプランし、小委員各位の献身的活動で10月半ばに一つのヤマを越えることができたものの、10月末からの協会米国調査研修の件とからみ、事務局は正直、一種のパニック状態。でも本当に、ご当局を始めご関係皆様方のご支援・ご協力で、この節目の行事一連が済みましたことに改めて感謝申し上げます。

なお、本号編集につきましては、特にご投稿をお願いしました方々には、少々無理なスケジュールであったかも知れませず、また一方では、頂いた内容又は要旨が出来上がった紙面並びに配列で、一部ご不満もあるかと思いますが、お写真ともども、タイムスケジュールと総紙面の点でのこと、ご容赦を頂きたく存じます。

その折のお言葉やご投稿、本当にありがとうございました。（Ｉ）